

特集もくじ

- 02— おしえて先生!
路地のあれこれQ&A
石樽 督和 (建築史・都市史研究者)
- 06— ぶり日記 三角地帯の2月
ぶり (オーガナイザー/イラストレーター)
- 08— 三角地帯の一品目めぐり
ヤマグチ ナナコ (編集者/イラストレーター)
- 10— もじ道楽 三角地帯編
山田 和寛 (デザイナー)
- 12— ぬすみ聞きパンチライン
益山 貴司 (脚本家/演出家/映像監督)
- 14— 映画の「遺跡」と思い出を映すスクリーン
しまおまほ (作家)

生活工房 アニュアルレポート 2022

Lifestyle Design Center Annual Report 2022

April 2022 — March 2023

生活と記録の実践集

世田谷・三角地帯に暮らしの痕跡を探す

そもそも
生活って記録
できるの?

生活工房とは？

About Lifestyle Design Center

暮らし × デザインの交流拠点

Lifestyle Design Center is
the crossroad of life and design.

物や情報が溢れる時代。生活工房は「モノ」だけでなく「コト」に光をあて、小さな物語に耳を傾けます。観たり、触ったり、感じたりする体験を通して、本当の豊かさや、大切にしたい文化をともに考える場をつくります。暮らしの根っこに触れること、なぜだろうと考えること、対話することを大切にしています。

In an age overflowing with things and information. Lifestyle Design Center illuminates the intangible as well as the tangible, paying attention to small stories. Through the experience of seeing, touching, and sensing, we ask: what is true abundance, what is culture? We value the creation of a space for dialogue, to touch on the roots of life and ask each other why.

生活工房 アニュアルレポート 2022

Lifestyle Design Center Annual Report 2022

April 2022 — March 2023



生活工房の事業

「展覧会」「ワークショップ」「セミナー」「地域と市民活動」の4つの事業を主として生活工房は運営されています。

Our Program

Lifestyle Design Center primarily supports the four programs of exhibitions, workshops, seminars, and local and regional activities.

I 展覧会 ———— 新たな発見が暮らしを彩る

生活工房ギャラリーやワークショップルームでは、デザインやクラフト、異文化など多角的なテーマで展示を実施しています。

II ワークショップ = 多彩なモノづくりを楽しむ

参加者が手や体を動かしながら「考え」「作る」ワークショップでは、子供から大人まで楽しめる多彩なプログラムを実施しています。

III セミナー ———— 社会を知る、学びを楽しむ

専門家やクリエイターを招き、暮らしや文化に関する生きた言葉に触れるさまざまな講演やトークイベントを実施しています。

IV 地域と ———— 地域とつながる

市民活動

地域の活動と交流を支援し、多様な価値観や共感の輪を広げ、ネットワークを構築し豊かな地域づくりをお手伝いしています。

I Exhibition ———— New Discoveries Embellish Daily Life

Exhibitions on diversified themes such as design, crafts, and foreign cultures are held in the Seikatsu-Kobo Gallery and the Workshop Rooms.

II Workshop ———— The Joy of Making Things

A variety of programs are held where participants of all ages can move their hands and bodies as they enjoy "think" and "make" workshops.

III Seminar ———— Understanding Society, Enjoying Learning

Experience living words on life and culture in various lectures and talk events given by specialists and creators.

IV Local ———— Connecting with the Region

Community

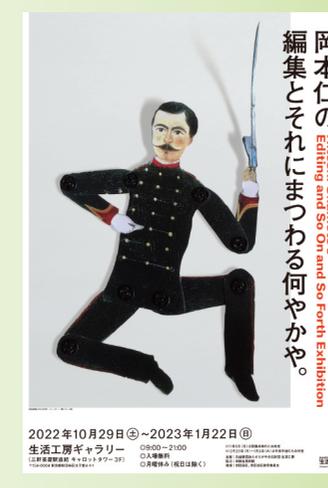
We assist with region-building by supporting area and regional activities and exchange, widening the circle of various values and sympathies, and creating vibrant networks.

目次 Contents

I 展覧会 Exhibition

生活工房とは？
生活工房の事業

I 展覧会 Exhibition	3
世田谷パブリックシアター開場25周年記念ポスター展	4
大竹英洋写真展 ノースウッズ 生命を与える大地	5
シュー・ウィンドウ 靴を紐とく展覧会	6
生活工房アレコレ2022 8ミリフィルム常設上映	7
岡本仁の編集とそれにまつわる何やかや。	8-9
続・セタガヤママ 小さなメディアの40年	10
II ワークショップ/セミナー Workshop/Seminar	11
子どもワークショップ ガムテープのズック屋さん	12-13
どう？就活 自分と仕事の出会い方 vol.2	14
オンライン開催だヨ！おうちに集合 第21回おはなしいっぱい／	
世田谷アートフリマpresents 夏休みワークショップ	15
対話の効能 〈わたし〉と〈あなた〉のあわい	16
III 地域と市民活動 Local Community	17
ちかくのとーく	18
穴アーカイブ：an-archive せたがやアカブの会／	
エトセトラの時間 見えるものと見えないものを語る会	19
世田谷市民活動支援会議／	
世田谷市民活動知っ得SDGs講座	20
市民活動支援コーナー／移動する中心 GAYA	21
施設ガイド	22-23
数字で見る生活工房	24





会場風景

世田谷パブリックシアター 開場25周年記念ポスター展

ポスターで振り返る劇場の四半世紀

開場25周年を迎えた世田谷パブリックシアターの歩みを、約90点のポスターで振り返る展覧会。

1997年4月5日に開館した世田谷文化生活情報センター（以下、センター）は、「世田谷パブリックシアター」と「生活工房」という、2つの機能からなる複合文化施設としてスタートした（現在は「音楽事業部」と「せたがや国際交流センター」が加わっている）。

本展では、センターの開館以前にまでさかのぼり、1988年に刊行された初期の計画概要パンフレットや、開館前に刊行されていた広報誌なども一部紹介。センター全体の歩みも回顧した。

会場内に設置した「ひとことボード」には、「観劇の思い出とともに当時の記憶が蘇った」という感想が散見され、一人ひとりの生活のなかに、劇場やセンターが存在していることを再確認する機会となった。



世田谷文化生活情報センターにまつわる資料



展示の感想や観劇の思い出を募った「ひとこと」ボード

来場者の声

40代の声

母の介護が終了した2014年度以降の作品しか観劇できていないのが残念に思うほど、あれ観たかったワ！これも！と思える作品たちがポスターから飛び出してきた、紙のポスター、チラシは絶対になくなってはいけないと強く思いました。

50代の声

「あ！このポスターもパブリックシアターだったのか！」と再発見もありました。当時の世田谷区の広報も、今見るとレトロな感じですし、「こんなふうに注目されていたんだ」と振り返る機会になりました。

60代の声

自分とパブリックシアターの関係について、振り返りが出来ました。こんなふうだったかと。

大竹英洋写真展

ノースウッズ 生命を与える大地

北米大陸に広がる世界最大級の原生林 「ノースウッズ」

2021年、写真集『ノースウッズ——生命を与える大地』（クレヴィス、2020年）で第40回土門拳賞を受賞した、自然写真家・大竹英洋の展覧会。世田谷文学館が行う、移動文学館事業の出張展示パネルを中心に構成した。

ちょうど展覧会がはじまる直前、大竹氏が2017年に上梓したエッセイ『そして、ぼくは旅に出た。はじまりの森 ノースウッズ』が文藝春秋より文庫化され、同書を含む関連書籍の特設コーナーを、会期中階下のTSUTAYA三軒茶屋店にて展開した。

エッセイにも登場するテントやキャンプ用具、携行した地図などの実物資料も展示。また、大竹氏がノースウッズでフィールドレコーディングした環境音を会場に流すことで、臨場感を演出した。

ちなみに、生活工房が位置する三軒茶屋は、大竹氏が幼稚園から小学校卒業まで住んでいた地元。これまで世田谷区内各所で写真パネルの展示を行ってきたが、三軒茶屋では今回が初の展示となった。



会場風景（撮影：澤木亮平）

データ

開催日時	2022年6月4日（土）～7月10日（日） 9:00～21:00（月曜休み）
会場	生活工房ギャラリー
来場人数	6,655名
共催	世田谷文学館



親子連れの来場者も多かった（撮影：澤木亮平）

来場者の声

30代の声

子どもが通りすがりに見たいというので寄りました。感動しました。ありがとうございました。

50代の声

職場が近いので、仕事の前後に何度も観に来ました。自然の音のなか大竹さんの作品を見ていると、心がスーッと静かに穏やかになりました。

70代の声

今ほど自然の大事さが叫ばれる時はない。良いタイミングの企画と思います。



著書や愛読書、ポジフィルム
の展示（撮影：澤木亮平）



オオカミのファーや、ムース
の革を使用した、冬の装備
（撮影：澤木亮平）

階下のTSUTAYAで展開した関連書籍コーナー



シュー・ウィンドウ 靴を紐とく展覧会

履けないクツ屋・靴郎堂本店が
三軒茶屋にやってきた！

私たちの暮らしを、文字通り足もとから支えている「クツ」。しかし、その構造や歴史、文化についてどのくらい知っているだろうか。本展は、靴郎堂本店（クツ創家／くつクリエイター）の“履けないクツ”を糸口に、身近なクツを楽しく紐とく試みだ。

会期中のほぼ毎週末、靴郎堂本店・佐藤いちろう氏は会場でお店番（在廊）をして、来場者とその場で“履けないクツ”を制作しながら、順次陳列していった。その数はなんと153足（つくり方はpp.12-13を参照）。

段ボールや新聞紙、ガムテープでできた個性豊かなクツが会場を埋め尽くした。クツづくりが、人が集まる場づくりへと変化する様子が印象的だった。

会場では実際の製靴工程も紹介。さらに、会期中に開催したジャーナリストとの対談でも、クツの歴史や文化など多方面に話題が広がった。展覧会や関連企画をきっかけに、足もとからライフスタイルを考える貴重な機会となった。

会場内の工房スペース（撮影：高田洋三）



会場風景。手前は「キャロットタワー・シューズ」（撮影：高田洋三）

データ

開催日時	2022年7月19日(火)～10月16日(日) 9:00～21:00(祝日をのぞく月曜休み)
会場	生活工房ギャラリー
来場人数	15,447名
協力	稲川實、皮革産業資料館、株式会社北條工務店

関連企画1 | 公開収録！靴を紐トーク

開催日時	9月24日(土) 16:30～18:00
会場	生活工房ギャラリー
司会進行	佐藤いちろう(靴郎堂本店)
ゲスト	大谷知子(靴ジャーナリスト)、城一生(靴業界ジャーナリスト)
参加人数	101回再生(12月17日時点)



トークイベント収録の様子（撮影：高田洋三）



値札にはクツの値段と作品名を記載（撮影：高田洋三）

関連企画2 | 閉店売り尽くし！「展示即売会」

開催日時	10月15日(土)・16日(日) 11:00～17:00(売切次第終了)
会場	生活工房ギャラリー
販売物	ガムテープのズック(完成品)1,000円 ガムテープのズック(自作セット)500円

来場者の声

10代の声

どの靴も遊び心があって、見ていて楽しかった。

30代の声

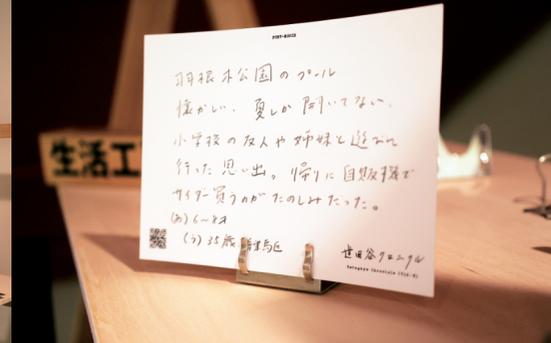
「くつって自分でつくれるんだ」という発見、おどろきがありました。

70代の声

とても面白い！実際にはけるように造ったので、きっと売れると思います。



展示風景



会場で募ったエピソードも展示

生活工房アレコレ2022 8ミリフィルム常設上映

昭和のアレコレを記録した、
8ミリフィルムを小さく上映

「生活工房アレコレ」は、「生活工房バックヤード展」(2021年1～2月開催)をきっかけに2021年4月から展開している小さな展示コーナー。生活工房のバックヤードに眠る事々物々や、開催中の展覧会やイベントに関する資料を紹介する目的で設置している。

昨年度から引き続き、ウェブサイト「世田谷クロニクル」(p.19参照)で公開中の8ミリフィルム映像を常設で上映。セレクトした映像は、1954(昭和29)年～1980(昭和55)年にかけて撮影された12巻。各映像の撮影月に合わせて、毎月8日に映像を入れ替えながら通年で上映・展示した。

会場では、来場者が映像をきっかけに思い出したエピソードを募った。「東京タワーの周囲が、全く高い建物がなくて新鮮」「昭和40年前後、夏に保田の海へ行っていました。(中略)民宿の裏の線路でSLを見た事を覚えています」など、多くの声が寄せられた。集まったエピソードは、SNSなどでも紹介している。

データ

開催日時	2022年4月8日(金)～2023年4月7日(金) 9:00～21:00(祝日をのぞく月曜休み、12月29日[木]～1月3日[火]は年末年始休み)
会場	生活工房ギャラリー(階段下)
来場人数	72,030名
企画制作	remo[NPO法人記録と表現とメディアのための組織]



『新百貨店落成式など』(1970【昭和45】年9月28日、1980【昭和55】年8～9月/店舗【上馬】、伊豆【静岡県】、一碧湖【静岡県】)



『野球』(1980【昭和55】年1月/自宅【梅丘】、羽根木公園)



『夫、兄、母』(1954【昭和29】年3月/原子爆弾落下中心地碑、大浦天主堂、長崎県内各所)

来場者の声

20代の声

誰かの日々がフィルムを通すと、時代の雰囲気も相まってドラマチックだ…。

30代の声

子どもの服やおむつやおもちゃやアイスなど違いをくらべ面白かった。

50代の声

ポストの下に牛乳受けの箱が映ったが、現在ではなくなってきた習慣がなつかしい。



会場風景 (撮影：澤木亮平)



車中の団いにも 絵が描かれた
ものが多くなってきた。



絵が描かれたトラックもでき、
これは歩くのランナー・トラック。



何かがまにに任せて、
さらに歩く。
歩く。
歩く。



展示の準備といる店。



通りかかった書店。

手書きの文字が話し言葉のように親しみを感じさせる (撮影：澤木亮平)

岡本仁の編集と それにまつわる何やかや。

編集者の視点

『BRUTUS』『relax』『ku:nel』などの雑誌編集に携わってきた岡本仁氏。美術、デザイン、映画、音楽をはじめ幅広い分野に向けられた興味や関心を、独自のスタイルで紹介してきた同氏のものの見方・考え方に触れることで、編集という行為をより身近にとらえることを意図した展覧会。

自室をイメージしたコーナーには、岡本氏が身のまわりに置く品々（絵画・オブジェ・書物）が並び、それを取り囲むように配置されたカウンターの上には、同氏が日々の暮らしのなかで撮影した、約70点の写真を展示した。写真には手書きのコメントが添えられ、それらを読み進めていくと、編集についての一編のフォトストーリーになっているという仕掛け。

また、岡本氏が編集した最新作として、タブロイド判の冊子『ART FOR ALL 20』を生活工房から刊行、階下のTSUTAYAにて会期中販売した。

考えるよりも感じることを主眼とした、一種のインスタレーション的な試みだったが、会期初日に偶然訪れた70代女性の一言、「視点がおもしろい」という感想が印象的だった。

展示什器の制作・会場施工はランドスケーププロダクツが担当 (撮影：澤木亮平)



いわおたまき氏の作品 (撮影：澤木亮平)



来場者の声

40代の声

岡本さんといっしょにお話ししながら散歩しているような感じで、ゆっくり歩きながら楽しめました。できればもっとお話がききたかったなー。そのくらい短くて濃い散歩になりました。

60代の声

話し言葉を追いかけるカンジが楽しかった。展示物もカワイイ。

70代の声

このコロナの毎日におしゃれな空気をすっぴい気持ちになりました。

生活工房YouTubeチャンネルで期間限定公開した、岡本氏による展示解説ムービー『岡本仁の展示とそれにまつわる何やかや。』 (撮影・編集：ヤングトゥリーフィルムズ)



データ

開催日時	2022年10月29日(土)～2023年1月22日(日) 9:00～21:00(祝日をのぞく月曜休み、11月6日[日] は設備点検のため休室、12月29日[木]～1月3日[火] は年末年始休み)
会場	生活工房ギャラリー
来場人数	14,116名
協力	世田谷美術館

関連企画1 |

GUEST TALK 1 若木信吾 (写真家、映像作家) × 岡本仁

開催日時	11月27日(日) 14:00～15:30
会場	セミナールームAB
参加人数	79名
参加費	1,000円

関連企画2 |

GUEST TALK 2 田島朗 (『BRUTUS』編集長) × 岡本仁

開催日時	12月11日(日) 14:00～15:30
会場	セミナールームAB
参加人数	66名
参加費	1,000円



『あめの会通信』『あめつうしん』
全338号が並ぶ (撮影：平野太呂)



「セタガヤマ」関連資料。
新聞広告など (撮影：平野太呂)



続・セタガヤマ

小さなメディアの40年

生活の延長で試みた、「ママ」たちの実験

1982年、世田谷区経堂に主婦・大橋正子氏が雑貨店「セタガヤマ」を開いた。雑貨販売だけでなく、貸本やミニFMなど、その活動は多岐にわたる。本展では「セタガヤマ」を中心に、子育て中の女性たちが試みた活動をたどりなおした。

その歩みは、1979年に主婦・平野公子氏が用賀の自宅マンションを開放した文庫「子どもザウルス」にはじまり、区内の公園や広場で芝居や祭りなどを行い幅広く活動した「あめの会」へと続く。1981年には『あめの会通信』も創刊。このなかで大橋氏は「セタガヤマ」を開店した。そして、同じく「あめの会」の田上正子氏は、現在も『あめつうしん』をガリ版で発行している。

会場では、デザイナーの平野甲賀氏による『子どもザウルス通信』から田上氏の『あめつうしん』最新号まで、約350点のミニコミ誌を展示。写真やミニFM放送局日記、関係者のエッセイも紹介した。彼女たちの小さく軽やかな活動は今も新鮮だ。SNSが普及した現在、その歩みに続くことはできるだろうか。

参加者の声

10代の声

古い歴史を知ることができて良かった。

20代の声

私も今の世田谷区の子育てを盛り上げられるようなことをしたい。

50代の声

小さなメディアの足跡を直接みる事ができた。

データ

開催日時	2023年1月31日(火)～4月23日(日) 9:00～21:00 (月曜休み)
会場	生活工房ギャラリー
来場人数	17,156名 ※3月31日時点
企画制作	horo books

関連企画1 |

おはなしとおにぎょう「はじめてのともだち」

開催日時	2月4日(土) ①11:00～②14:00～(各回30分程度)
会場	セミナールームAB
絵本制作 出演	横山てんこ (美術家/人形遣い/俳優)
出演	関根真理 (パーカッションリスト)
対象	幼児～(小学校3年生以下は保護者同伴)
参加人数	121名
参加費	500円 (同伴者無料)

関連企画2 |

お面づくりワークショップ

開催日時	3月21日(火・祝) 14:00～15:00
会場	ワークショップルームA
講師	佐々木未来 (イラストレーター/グラフィックデザイナー)
対象	小学校1年生～(小学校3年生以下は保護者同伴)
参加人数	9名
参加費	500円 (同伴者無料/材料費込)

関連企画3 | ファミリー寄席

開催日時	4月23日(日) 14:00～16:00 (途中休憩あり)
会場	ワークショップルームAB
出演	古今亭始、古今亭佑輔
対象	小学校1年生～(小学校3年生以下は保護者同伴)
参加費	500円 (同伴者も有料)

II ワークショップ / セミナー Workshop / Seminar





展示会場で行った週末ワークショップの様子 (撮影: 高田洋三)

子どもワークショップ ガムテープのズック屋さん

履けないクツ屋の小さなギルド

靴郎堂本店(クツ創家/くつクリエイター)による展覧会「シュー・ウィンドウ」の関連イベントとして開催した。実際の製靴工程をもとに段ボールと新聞紙、ガムテープでズックを制作。ズックの語源は、織物にあり、今回布ガムテープを使用した理由はここにある。

クツづくりは、展示会場に陳列されたクツのベース素材から、サイズと色を選ぶところからはじまる。ベース素材にベロの部分を着着。紐を通す部分に穴あけとハトメ加工を施し、シールなどで装飾する。最後に、靴紐と値札をつけて完成となる。「一日店長」になって会場内で記念撮影も行った。ちなみに、“履けないクツ”と称しているが、履くこともできる。

また、展覧会の来場者が制作したクツは、10月15、16日の「展示即売会」まで会場内に展示した。毎週来場して9足もつくった小学生や、ワークショップがきっかけで美術系の高校に進路を決めた中学生など、計100名以上が参加。子どもから大人までゆるやかにつながる、小さなギルドが会場に生まれていた。



ベロの付け方を教える靴郎堂本店・佐藤いちろう氏

データ

開催日時	2022年7月30日(土)・31日(日)・8月6日(土)・7日(日) 13:00~17:00 (各日完結)
会場	セミナールームAB
講師	佐藤いちろう(靴郎堂本店)
対象	小学校1年生以上 (小学校2年生以下は保護者同伴)
参加人数	46名
参加費	1,000円(材料費込み)

関連企画 | 週末ワークショップ

開催日時	7月23日(土)・24日(日)・8月20日(土)・21日(日)・27日(土)・28日(日)・9月3日(土)・4日(日)・10日(土)・11日(日)・17日(土)・23日(金・祝)・24日(土)・25日(日)・10月1日(土)・2日(日)・8日(土)・9日(日) 11:00~17:00(9月24日のみ10:00~16:00)
会場	生活工房ギャラリー
参加人数	約140名

参加者の声

小学1年生の声

色々な形に切ったり貼ったりして面白かったです。

小学3年生の声

穴をあけるときのになんとも手にあたって痛かったけど、結果的に出来上がってうれしかったです。

小学5年生の声

思うがままにいろんなように作れた。



靴紐を通すハトメの準備



一日店長になって記念撮影



ワークショップ参加者が制作したクツ (撮影: 高田洋三)



ガムテープ素材のクツ (撮影: 高田洋三)



穴あけの様子



ハトメハンドプレスを使って制作



出来上がったクツは履くことができる (撮影: 高田洋三)



ゲストのトークを聞いた後に参加者同士で対話する様子

どう？就活

自分と仕事の出会い方 vol.2

人は知らず知らずのうちに、いろんな人・モノ・コトに偶然出会い、触発されている

働くことや生き方について、疑問や悩みを抱く若年層に向けたセミナーの第2弾。働き方研究家の西村佳哲氏のファシリテートのもと、ゲストが「働くってなに？」「会社ってなに？」のテーマに沿って就職活動の体験談や会社経営について語った。また、参加者同士も対話して考えを深め合った。

就職活動の話で印象的だったのは、ゲストの今井紀明氏の体験談だ。面接で今まで伏せてきた過去を正直に語ったとき、面接者から「それは営業のネタになる！」と一瞬で個性豊かな人材としてポジティブに捉えられ、思いもよらぬ方向に人生が動き出していくのは爽快だった。ゲストの仕事や人生の道程を振り返るなかで見えてくることは、いろいろな人・モノ・コトに偶然出会い、触発されているということ。遠まわりに感じるような過去の経歴のすべてが、有機的に作用しながら今現在の仕事につながり役立っていることに自覚的になると、自分の過去や現在が愛おしくなり、未来がちよっとだけ楽しみになるかもしれない。

ゲスト：
左から
吉倉理紗子氏
青木祐子氏
白石宏子氏



ゲスト：松山剛己氏

ゲスト：さこうもみ氏



ゲスト：今井紀明氏

ファシリテーター：西村佳哲氏

働くってなに？

開催日時	2022年12月3日(土) 13:00~18:30
ゲスト	今井紀明(認定NPO法人D×P理事長)、さこうもみ(社会起業家)
参加人数	44名

会社ってなに？

開催日時	2022年12月4日(日) 13:00~18:30
ゲスト	青木祐子、白石宏子、玉置純子、吉倉理紗子(株式会社スティルウォーター)、松山剛己(松山油脂株式会社・株式会社マークスアンドウェブ代表取締役社長)
参加人数	48名

会場	セミナールームAB
ファシリテーター	西村佳哲(働き方研究家)
対象	10代以上の方
参加費	各日1,000円
企画	Living World

参加者の声

20代の声

昨年からの参加ですが、本当にゲストのジャンルが広く、新たな発想を、考えを得られるこの場は貴重だと思います。

30代の声

気づき、学び、刺激、感動、感銘、さまざまなことを得て、大ヒットでした。楽しかったです！

40代の声

これまでのこと・これからのことについて2日間でいろんな考えが浮かび、種が植えられた感じ。



参加者の声

30代の声

デイサービスの施設で利用の子どもたちと視聴しました。素敵な企画をありがとうございました。

室井さと子氏(絵本作家)

データ

開催日時	2022年8月24日(水)・25日(木)・26日(金) 11:00~15:00
会場	オンライン(Zoomウェビナー)
出演	おはなしポケット、Akinoファミリーバンド、室井さと子(絵本作家)、世田谷区立図書館、世田谷区立成城さくら児童館、高柳芳恵(ナチュラリスト)、おはなしかご(魔法使いの学校)、世田谷区立弦巻児童館+おはなし広場、渡部豊子(山形の伝承の語り手)
対象	幼児~小学生(大人も参加可)
参加人数	1,131名
参加費	無料
共催	世田谷おはなしネットワーク

シルクスクリーン印刷で世界に一枚だけのギャザーバッグをつくろう

開催日時	2022年8月20日(土) ①10:00~11:30 ②13:30~15:00 ③16:00~17:30(各回完結)
講師	TReC1and2(クリエイター)
対象	小学校3~6年生
参加人数	14名
参加費	1,000円(材料費込)

自分だけのキャンドルホルダーをつくろう

開催日時	8月21日(日) ①11:00~13:00 ②15:00~17:00(各回完結)
講師	asami(JCA認定キャンドルアーティスト)
対象	小学校4~6年生
参加人数	19名
参加費	1,000円(材料費込)
会場	セミナールームAB
共催	世田谷アートフリマプロジェクト

参加者の声

10代未満の声

どこに何の素材を置くか考えて工夫しながらキャンドルホルダーを作るのが楽しかった。

オンライン開催だヨ！おうちに集合 第21回おはなしいっぱい

おはなしの会がオンラインで大集合！

「世田谷おはなしネットワーク※」との共催事業は、今年で21回目。新型コロナウイルス感染拡大の影響で、オンライン開催に変更して3日間配信を行った。

区内の図書館や児童館のほか、千葉県を拠点とするおはなしグループや山形県在住の語り部といった、地方で活動する方々も出演。プログラムはおはなし会だけにとどまらず、楽器演奏と詩を組み合わせた演目や絵本作家のトークなど、多彩な取り組みを展開した。

※1997年活動開始。世田谷区内の複数のおはなしの会が連携し、図書館などで活動中。現在、60のグループ・個人会員からなる

世田谷アートフリマ presents 夏休みワークショップ

思い出や好きなものを作品にする

ものづくりを楽しむ市民の発表・販売の場「世田谷アートフリマ」ゆかりの作家たちによる夏休みワークショップを開催した。

「シルクスクリーン印刷で世界に一枚だけのギャザーバッグをつくろう」では、自分の好きなキャラクターや夏の思い出を描いたイラストを製版してプリント。出来上がったバッグを学校で使うことを楽しみにしている子どもが多かった。「自分だけのキャンドルホルダーをつくろう」では、ドライフラワーや貝殻などのカラフルな素材を全方向から楽しめるように、ピンセットを使って丁寧にレイアウト。涼やかで美しいキャンドルが出来上がった。



ピンセットを使ってレイアウトを整える

ギャザーバッグのプリントは4人がかりで制作



「回復共同体」の体験「アフメーション」で絆のテープが完成した様子

対話の效能

〈わたし〉と〈あなた〉のあわい

私のなかにある複数の自己に出会いなおす

「対話」がもたらす效能と可能性について、対話を重視したアプローチの実践者とともに学び・体験する4つのセミナーを開催した。

「哲学対話」では、対話を行うときに私たちのなかでどのようなことが起こっているのかを学び、プログラムの後半に哲学対話を行った。

「オープンダイアログ」では、人間の自由や自律において、ポリフォニックな感覚はなぜ重要なのかについて対話した。また、「シナリオ付きロールプレイ」や「リフレクティング」など「オープンダイアログ」のエッセンスを体験した。

「回復共同体」では、映画『プリズン・サークル』を鑑賞して感想を分かち合った。後半は、回復共同体で重視される〈サンクチュアリ〉や〈エモーショナル・リテラシー〉について対話し、「感情のタペストリー」「アフメーション」を体験した。

最終回の「まあたらしさに出会うとき」では、美学者の伊藤亜紗氏と映画監督の濱口竜介氏が、芸術表現を通して日常の会話や対話の可能性を再考した。



左が伊藤亜紗氏、右が濱口竜介氏

哲学対話【講演+体験】

開催日時	2023年2月19日(日) 13:00~18:30
講師	河野哲也(哲学者・立教大学教授)
特別講師	盛岡千帆、尾崎絢子、浅野萌、朝倉絵理(NPO法人こども哲学・おとな哲学 アーダコーダ)
参加人数	103名
参加費	2,000円(講演のみ1,000円)

オープンダイアログ【講演+体験】

開催日時	2023年2月23日(木・祝) 13:00~18:30
講師	斎藤環(精神科医)、大井雄一(精神科医)
参加人数	107名
参加費	2,000円(講演のみ1,000円)

回復共同体【上映+講演+体験】

開催日時	2023年3月4日(土) 10:00~18:00 10:00~12:30 映画『プリズン・サークル』
講師	毛利真弓(臨床心理士/公認心理師)、藤岡淳子(臨床心理士/公認心理師)
参加人数	106名
参加費	3,000円(上映のみ1,000円)

まあたらしさに出会うとき【トーク】

開催日時	2023年3月19日(日) 14:00~16:00
講師	伊藤亜紗(美学者)、濱口竜介(映画監督)
参加人数	158名
参加費	2,000円

トータルファシリテーター	山内泰(NPO法人ドネルモ代表理事/一般社団法人 大牟田未来共創センター理事)
会場	ワークショップルームBほか
協力	NPO法人こども哲学・おとな哲学アーダコーダ 合同会社東風、一般社団法人もふもふネット

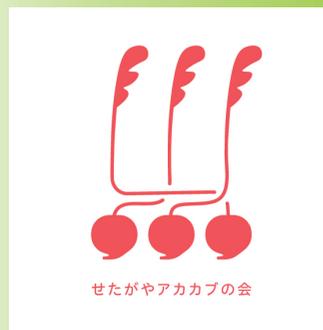
参加者の声

30代の声
対話をおさなりにしかけている自分に気づけて良かった。

40代の声
生の対話の価値に気づいた大変良質なセミナー。

50代の声
「回復共同体」の体験「アフメーション」で、各班で繋がりが合ったテープを持って立ち上がった時は心が震えた。

III 地域と市民活動 Local Community



ちかくのとーく

ちかくの活動をちかくの人に 紹介するトークシリーズ

昨年度のキックオフを経て始動した「ちかくのとーく」。古今を問わず、世田谷区内のまちづくりや市民活動、地域に関わる文化活動などについて、ゲストを招き紹介するトークプログラムだ。

今年度は区内3つの地域ごとに、3本のプログラムを開催した。「下北沢のおせっかいとまちつどい」

では、商店街の変遷や子どもが中心に集うコミュニティ食堂の活動を発表。「三茶で語る、住民参加と演劇のこと」



ちかくのとーく vol.03の様子

では、1980年頃に羽根木公園で開催した黒テントの演劇公演から、25周年を迎えた世田谷パブリックシアター設立時の話まで幅広く伺った。また、「二子玉川の持続可能なコミュニティ」では、町会と企業が一緒に取り組む「二子玉川エアーマネジメント」の活動が語られた。いずれも対面とオンラインで開催し、区外からの参加者も多い。

近年、NPO法人は減少傾向にある。NPO法の施行から約四半世紀が経ち、市民活動の担い手も変化の時を迎えている。身近で実践している人々の声を通して、地域社会のこれからを考えていきたい。



ちかくのとーく vol.01の様子。左が齋藤淳子氏、中央が柏雅康氏

vol.01 下北沢のおせっかいとまちつどい

開催日時	2022年7月3日(日) 14:00~16:00
ゲスト	柏雅康(しもきた商店街振興組合理事長)、齋藤淳子(一般社団法人北沢おせっかいクラブ代表理事)
参加人数	19名(オンライン14名)

vol.02 三茶で語る、住民参加と演劇のこと

開催日時	2022年11月13日(日) 14:00~16:00
ゲスト	松井憲太郎(演劇評論家)、花崎攝(シアター・プラクティショナー)
参加人数	43名(オンライン25名)

vol.03 二子玉川の持続可能なコミュニティ

開催日時	2023年2月19日(日) 14:00~16:00
ゲスト	小林直子(一般社団法人二子玉川エアーマネジメント事務局)、中村輝之(玉川町会事務局長)
参加人数	26名(オンライン13名)
会場	セミナールームB (vol.01~02)、市民活動支援コーナー (vol.03)
聞き手	市川徹(まちづくりコーディネーター)
記録	千葉晋也(まちづくりデザイナー)
参加費	200円(オンラインは無料)

参加者の声

30代の声

地域のために自主的に活躍されている皆様のお話をお伺いでき、大変勉強になりました。

50代の声

「人」がまちを動かしていることを体感しました。

60代の声

世田谷区の文化活動への理解が深まりました。

参加者とのディスカッションや質疑応答も



貴重な資料も紹介。左が松井憲太郎氏、右が花崎攝氏



せたがやアカカブの会の様子。毎回15名程度が参加

穴アーカイブ: an-archive せたがやアカカブの会/ エトセトラの時間 見えるものと 見えないものを語る会

記録に残るもの、残らないもの、等々

世田谷区民から提供いただいた84巻の8ミリフィルムを公開しているウェブサイト「世田谷クロニクル」。映像の利活用の一環として、2つのプログラムを実施した。

2020年1月以来、郵便による遠隔開催となっていた「せたがやアカカブの会」は、約2年ぶりに対面で開催した。東京から埼玉へ疎開し、そこでの暮らしぶりを語った参加者など、映像をきっかけに思い出した語りの数々。ここでしか聞けない話で溢れた。

「エトセトラの時間」では、目の見えない人がナビゲーターとなってオンラインで映像を鑑賞した。また、ワークショップの音声記録「会話録」をYouTubeで公開。参加者の言葉が添えられている。



エトセトラの時間の様子。手話通訳付き

せたがやアカカブの会

開催日時	vol.31: 2022年6月19日(日)・vol.32: 2022年9月17日(土)・vol.33: 2023年1月21日(土)・vol.34: 2023年3月18日(土) 14:00~15:30
会場	セミナールームAB (vol.34のみワークショップルームA)
参加人数	70名(ハガキ参加16名)
参加費	無料
企画制作	remo [NPO法人記録と表現とメディアのための組織]



郵送で届いたハガキも紹介

エトセトラの時間 見えるものと見えないものを語る会

開催日時	2022年10月10日(月・祝)・11月23日(水・祝)・12月17日(土) 14:00~16:30(各日完結)
会場	オンライン(Zoomミーティング)
参加人数	21名
参加費	無料
企画制作	remo [NPO法人記録と表現とメディアのための組織]、視覚障害者をつくる美術鑑賞ワークショップ

参加者の声

10代の声

見える人は見たものから意見を出し、見えない人は見える人からの情報から当時の時代背景などを想像することで、双方が楽しめる企画だと感じた。

40代の声

通常であればこぼれおちていくなちよっとしたつぶやきや思いを、「なかったことにせず」、みんなで言葉にして残していくことで、自分だけでなくそこに集った方々のそれぞれの思いに「愛しさ」が生まれるような、そんな時間でした。

50代の声

なんでもないような日常でも、複数人で見るといろんな発見があって楽しかったです。

市民団体のための活動の場

市民活動支援コーナーは、世田谷区内で活動するさまざまな市民団体のための活動の場。日常的なミーティングや講座に利用できる登録制の貸出スペースが3部屋あるほか、プリントアウトスペースには複合機や紙折り機、大判印刷機も完備し、活動のためのチラシやポスター、資料づくりに活用できる。また、情報掲示板とチラシラックを備え、団体のメンバー募集やイベント情報の告知のために利用が可能。

市民活動団体のニーズを的確に汲み取り、柔軟に対応するため、運営は中間支援組織である、NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）に委託している。

2020年に内装を大幅にリニューアルし、開放的で明るい空間に生まれ変わった。新型コロナウイルス感染拡大の影響から、ここ数年は以前に比べ、団体の利用頻度は低い傾向にあったが、今年度から徐々に活気を取り戻し、活動も盛んになってきている。

市民活動支援コーナー

データ

開館時間	9:00～21:00（祝日をのぞく月曜休み）
場所	生活工房3F
委託先	NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）
来場人数	7,782名



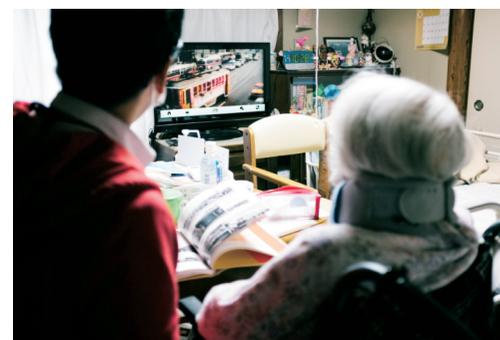
スペースA。最大20名まで使用可能（撮影：高田洋三）

移動する中心 | GAYA

映像をみる、きく、はなす

ウェブサイト「世田谷クロニクル」を利活用するプロジェクトとして、2019年に始動した。その一環である「サンデー・インタビューーズ」では、参加者6名と毎月オンラインで映像を囲むワークショップを開催。個々の視点を持ち込みながら、映像を紐といていった。また、昨年度の参加者はフィールドワークを行うなど、より踏み込んだ展開を試みた。

さらに、ケアの現場で活用を探る「ポスト・ムービー・トレイル」も実施。デザインリサーチャーの神野真実と訪問看護師／写真家の尾山直子と協働して、在宅医療の現場で上映した。



「ポスト・ムービー・トレイル」の様子（撮影：尾山直子）

データ

開催日時	2022年4月～2023年3月（通年）
特設ウェブサイト	https://aha.ne.jp/si/
参加人数	57名
参加費	無料
共催	東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、remo [特定非営利活動法人記録と表現とメディアのための組織]
企画制作	AHA! [Archive for Human Activities / 人類の営みのためのアーカイブ]

世田谷市民活動支援会議

市民活動を支えるネットワーク

世田谷市民活動支援会議（通称：Netty）は、「より良い地域社会をつくるための市民活動」を支えるネットワーク。行政である世田谷区と、NPOをはじめとした市民活動やボランティア団体を支援する、6つの中間支援組織で構成されている。

今年度は、連絡会議を通じて定期的な情報交換を行ったほか、市民活動に役立つ情報をまとめた冊子『知っ得情報2023』を発行した。

また、広石拓司氏（株式会社エンパブリック代表取締役）を講師に招き、「SDGsから学ぶ市民活動セミナー」（2023年3月16日、オンライン）を開催した。



世田谷市民活動支援会議が主催したセミナー

データ

ほかの構成団体	社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会、一般財団法人世田谷トラストまちづくり、社会福祉法人世田谷ボランティア協会、NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）、社会福祉法人共生会SHOWA、世田谷区生活文化政策部市民活動推進課
---------	---



幅広い年代の参加者が集まった

データ

開催日時	2022年12月21日（水）14:00～15:00 2023年1月28日（土）14:00～15:00 ・2月3日（金）19:00～20:00
会場	市民活動支援コーナー
参加人数	12名
参加費	無料
企画制作	NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）

参加者の声

60代の声

SDGsと市民活動とのかかわりを考えるよい機会となりました。

世田谷市民活動 知っ得SDGs講座

SDGsと市民活動の関係とは？

政府をはじめ、地方公共団体や民間企業など、各分野において取り組みが進められているSDGs（持続可能な開発目標）について、自分たちの暮らしにどのような意味があるのか、市民活動とどのような関係があるのか、市民活動支援コーナーを利用している団体を対象にセミナーを行った。

後半では、普段取り組んでいる活動についてSDGsの17の目標と照らし合わせて考える時間を設け、まだ気づいていない活動の価値をともに考えて掘り起こす機会となった。幅広い世代の参加者が集まり、「自分の目標を達成させるためのエネルギーをいただいた」といった声が聞かれた。

施設ガイド Floor Guide

生活工房は、地域の人々の活動や発表の場！

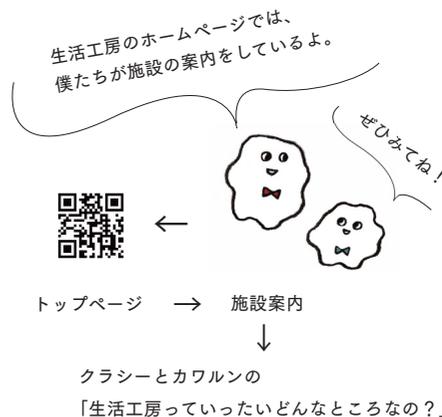
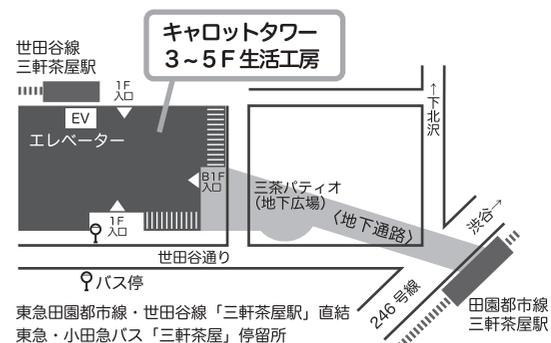
多彩な設備を備えたスペースで独自の企画を行うほか、市民団体などにお部屋を貸し出しています。スペースごとに登録条件・利用方法などが異なりますので、詳細はお問い合わせください。

5F —— セミナールームA・B [RENTAL OK](#)

4F —— ワークショップルームA・B [RENTAL OK](#)

3F —— 生活工房ギャラリー／市民活動支援コーナー

休館日 管理休館日	年末年始・月曜日（祝日をのぞく）
所在地	東京都世田谷区太子堂4-1-1 キャロットタワー
TEL	03-5432-1543
URL	https://www.setagaya-ldc.net



世田谷文化生活情報センター
生活工房
Lifestyle Design Center

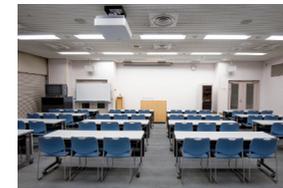
5F —— 講演会やミーティングに最適

「セミナールーム」は、講習会や会議に適したスペースです。プロジェクターを含む映像・音響設備も備え、効果的なプレゼンテーションが可能です。

A・B各部屋の可動式間仕切りを外せば最大で120名（机椅子使用時は108名）まで収容できます。

セミナールームA

74㎡/定員48名
利用時間：9:00~22:00



セミナールームB

83㎡/定員48名
利用時間：9:00~22:00



4F —— ものづくりや展示を楽しむ

「ワークショップルームA」は、ものづくりやトークイベントに対応したスペースで、併設されたキッチン（63㎡）には、各種厨房用品も備えています。大人数の交流会にも最適です。

「ワークショップルームB」は、扇形の壁面が特徴的な展示スペースです。可動パネルで室内のレイアウト変更ができ、多様な展示が行えます。音響や映像機器を使った集会などの開催も可能です。

ワークショップルームA

126㎡/定員50名
利用時間：9:00~22:00



ワークショップルームB

145㎡/定員50名
利用時間：9:00~22:00



3F — 生活工房の展示や市民活動の拠点

「生活工房ギャラリー」は、暮らしのデザインやクラフト、異文化紹介などをテーマに、生活工房が主催する企画展示を行っています（一般への貸出はしていません）。

「市民活動支援コーナー」は、世田谷で活動している市民活動団体が打ち合わせや作業を行うことができるスペースです。印刷機などの利用も可能です（有料）。

生活工房ギャラリー

開館時間：9:00~21:00



市民活動支援コーナー

利用時間：9:00~21:00



数字で見る 生活工房

2022.4.1 - 2023.3.31 Database

事業数

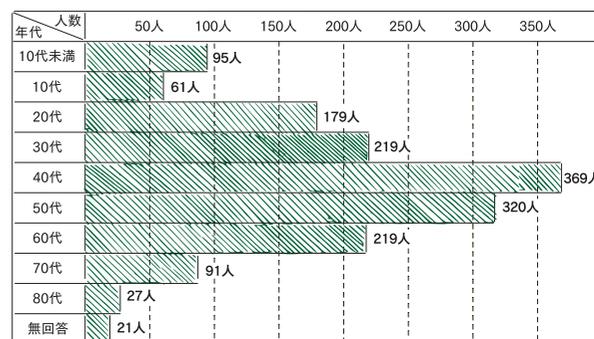
事業総数	22件
展覧会	6件
展覧会関連イベント	4件
ワークショップ	3件
セミナー・イベント	3件
地域と市民活動	6件

来場者数

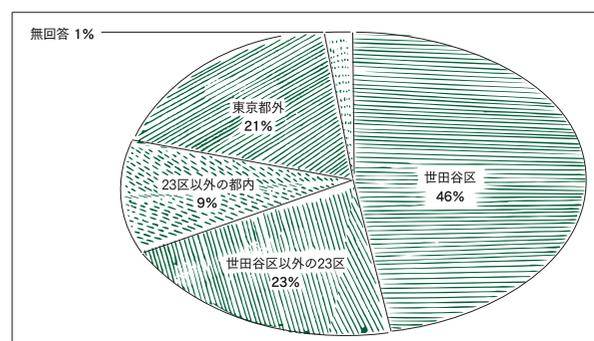
来場者総数	159,741人
展覧会	133,658人
展覧会関連イベント	275人
ワークショップ	219人
セミナー・イベント	1,697人
地域と市民活動	8,030人
貸館使用者・来場者	15,862人

※4Fワークショップルームは2022年4月1日～2023年1月21日の期間、ワクチン集団接種会場として使用した。2022年度、当会場で集団接種を受けた人数はのべ64,473名（貸館使用者・来場者数に含めず）

来場者の年代



来場者の住まい



※2022年度来場者アンケート（2022年4月1日～2023年3月31日）601件のデータより

ご支援・ご協力いただいた企業、団体、教育・公共機関など（各50音順・敬称略）

共催 ——— NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）、
世田谷アートフリマプロジェクト、世田谷おはなしネットワーク、
世田谷パブリックシアター、世田谷文学館、東京都、
（公財）東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、
remo [NPO法人記録と表現とメディアのための組織]

協力 ——— NPO法人こども哲学・おとな哲学アーダコーダ、世田谷美術館、
（同）東風、皮革産業資料館、（株）北條工務店、
（株）ポスターハリス・カンパニー、（一社）もふもふネット

協賛 ——— 世田谷パブリックシアター友の会

後援 ——— 世田谷区、世田谷区教育委員会

生活工房アニュアルレポート2022

発行日 ——— 2023年5月25日

編集 ——— 多田智美、永江大、鈴木瑠理子（株式会社 MUESUM）、生活工房

デザイン ——— 吉田勝信（吉勝制作所）

裏表紙写真 ——— 澤木亮平

印刷 ——— 今野印刷株式会社

協賛 ——— 株式会社東急コミュニティー

発行 ——— 公益財団法人せたがや文化財団 生活工房
〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1キャロットタワー
電話：03-5432-1543 ファックス：03-5432-1559
メール：info@setagaya-ldc.net
https://www.setagaya-ldc.net

次年度のお知らせ 2023年度事業（4～6月）のご案内

1月31日④～4月23日④ 続・セタガヤママ 小さなメディアの40年
5月16日④～7月17日④④ 牧野伊三夫展 塩と杉

生活工房アニュアルレポートとは——
生活工房の1年間の活動をまとめた記録・報告書です。

本書の無断転写、複製、転載を禁じます。
©Setagaya Arts Foundation Lifestyle Design Center 2022-2023
Printed in Japan

特集もくじ

- 02—おしえて先生！
路地のあれこれQ&A
石樽督和（建築史・都市史研究者）
- 06—ぶり日記 三角地帯の2月
ぶり（オーガナイザー／イラストレーター）

- 08—三角地帯の一品めぐり
ヤマグチナナコ（編集者／イラストレーター）

- 10—もじ道楽 三角地帯編
山田和寛（デザイナー）

- 12—ぬすみ聞きパンチライン
益山貴司（脚本家／演出家／映像監督）
- 14—映画の「遺跡」と思い出を映すスクリーン
しまおまほ（作家）



「文字や形に残らない、
暮らしの営みは記録できるのだろうか？」

この問いからはじまった昨年度の特集テーマを引き継ぎ、
2022年度は世田谷・三軒茶屋駅前の通称「三角地帯」に
目を向けます。

路地が複数の商店街を縦横に結び、新旧さまざまな店舗
が軒を連ねる三角地帯。世田谷通り（旧大山道）と玉川通
り（国道246号）に挟まれたこのエリアは、公私を緩やかに
つなぐ路地空間と戦後の青空市から発展した商店街を残
しながら変化し続けています。ここが近現代を生きる人々
の営みを残す場所とするなら、それを記録し語ることが、
これまで続けてきたこのまちの生活文化を引き継ぐこ
とになるかもしれない――。

本特集では、さまざまな分野の実践者とともに三角地帯の
路地をリサーチ。そこかしこに残された暮らしの痕跡を手
がかりに、このまちの根っこ＝文化とも言うべき自治性・
界隈性を、各々の視点で考察していきます。

読者のみなさまへ

寄稿文のまわりの余白には、読みながら思い出した、
生活や記録にまつわるアレコレを自由に書き込んでください。

生活と記録の実践集

世田谷・三角地帯に暮らしの痕跡を探す

そもそも
生活って記録
できるの？

おしえて先生！これQ&A 路地のあれこれ

三軒茶屋の三角地帯を調査するにあたって、そもそも「路地」とは何か、都市のなかにどのように生まれたものなのか、建築史・都市史が専門の石樽督和さんに質問を投げかけてみました。

Q.1 三角地帯のような「路地」は、どのようにできていったのでしょうか？

「路地」というと建物に挟まれた比較的細い野外の道のことを思い浮かべるのではないのでしょうか。そういった「路地」は日本中にありますが、三軒茶屋の三角地帯にある「路地」は戦後復興期に建てられた「マーケット」に由来しています。

マーケットとは、木造の低層の建物によってできていた高度成長期頃までの日本の都市において一般的であった商業施設で、通路に沿って小さなお店が並べられた市場状の建物です。

1940年代後半のマーケットは、多くが間市として機能していました。間市とは文字通り間取引が行われていた、つまり統制経済下で正規の流通ではない取引が行われていた店が集積した市場です。終戦直後の東京、空襲を受けた駅前や戦中期に建物疎開によって建物が除去された駅前には、間市が立ち上がりました。間市はしばらくすると通路は野外のまま、店舗部分を長屋にしたマーケットへと姿を変えていきました。

三軒茶屋の三角地帯に平行に路地が並び、さらにそれに接続した路地にも小さなお店が並んでいるのは戦後復興期のこうした都市空間の形成を起源にしているからです。図1は1937年の三角地帯の地図で、図2は1953年の三角地帯周辺の地図です。三角地帯に戦前にはなかった路地が形成されていることがわかります。ここに市場空間が戦後にできたからです。図2にさらに注目してみてください。こうした市場状の空間「マーケット」は三角地帯だけでなく、茶沢通り沿い、世田谷通り沿い、246沿い側にも展開していたことがわかります。三軒茶屋ではこのうち三角地帯の内側が残ったのです。

Q.2 「路地」の特徴とは？都市が整備され消えつつある路地の営みを引き継ぐとしたら、何に着目するとよいでしょうか？

路地を特徴づけているのは、人間の「営み」の現れではないでしょうか。路地は建物に挟まれ、さらに道が曲がっていたりすると、囲まれた空間になります。それが親密な空間をつくっていて、路地の魅力の骨格をつくっているのですが、それだけでは「路地の営み」とまでは言えないでしょう。その場所を人が触って動かし、調整し、使う「モノ」で溢れていることが重要です。そうなってくると、路地は野外ですがインテリアのような、都市空間でありながら身体に近い場所になってくるはずです。

「路地の営み」を引き継ぐには、路地の骨格をつくる建物群がまず大切です。小さなコマが集積して多様な人が集まって商売をする、過ごせる骨格が必要です。そして、次に着目するのは、そこに溢れる「モノ」です。ポスターや手書きの張り紙、椅子、看板、ライト、地面の舗装、植栽などなど、建物よりも小さなモノたちと、工夫しながら人々が行うそれら小さなモノたちのレイアウトです。

いしくれ・まさかず

1986年岐阜市生まれ。単著に『戦後東京と間市』（鹿島出版会、2016年）、共著に『津波のあいだ、生きられた村』（鹿島出版会、2019年）ほか。明治大学理工学部建築学科卒業。博士（工学）。関西学院大学建築学部准教授。



図1：1937年の三角地帯周辺の地図（都市整図社「火災保険特殊地図」をトリミング）。現在のエコー中興世の前身と考えられるが、その南西側の路地群は見られない。

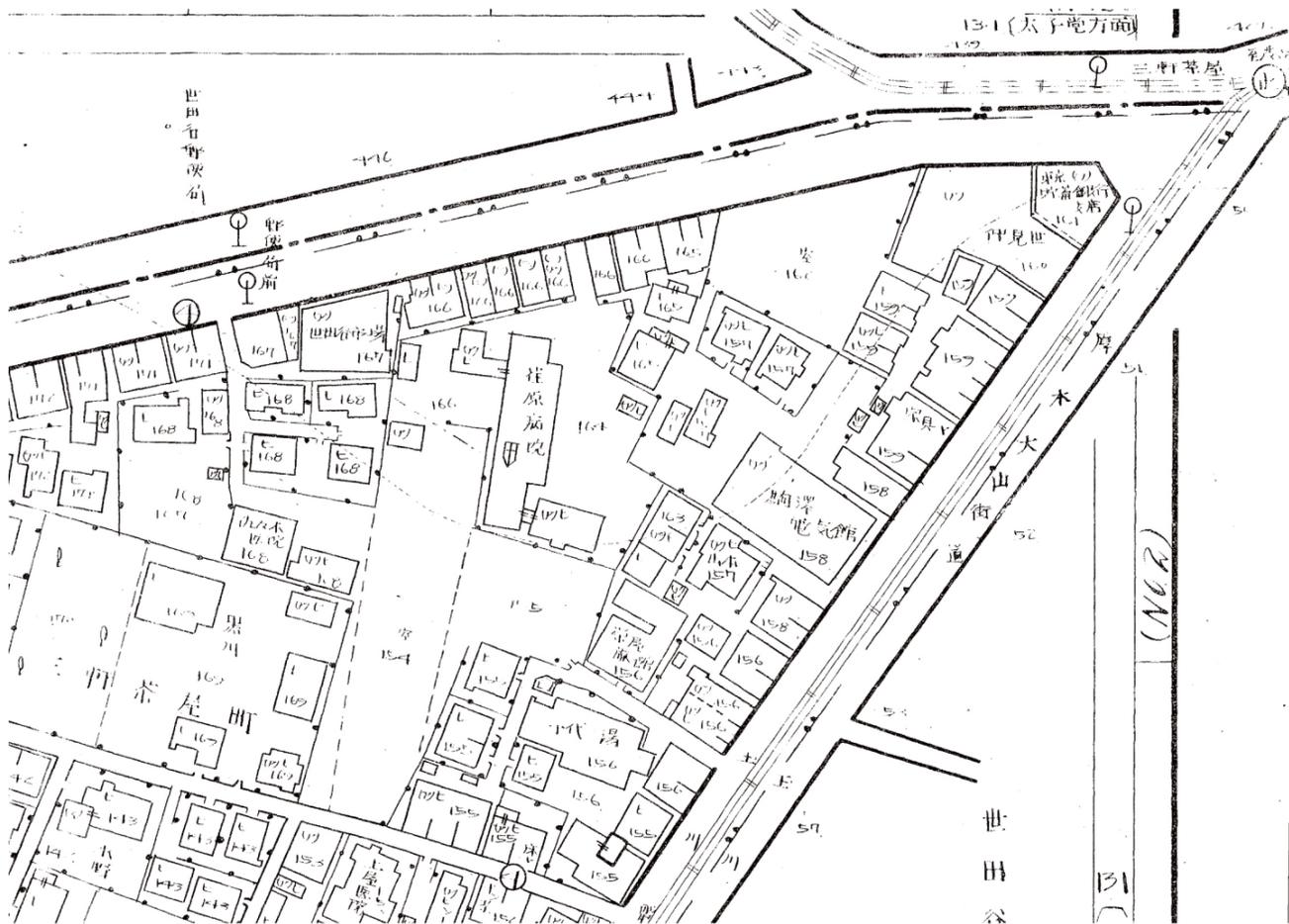


図2：1953年の三軒茶屋周辺の地図（都市整図社「新興市場地図」をトリミング）



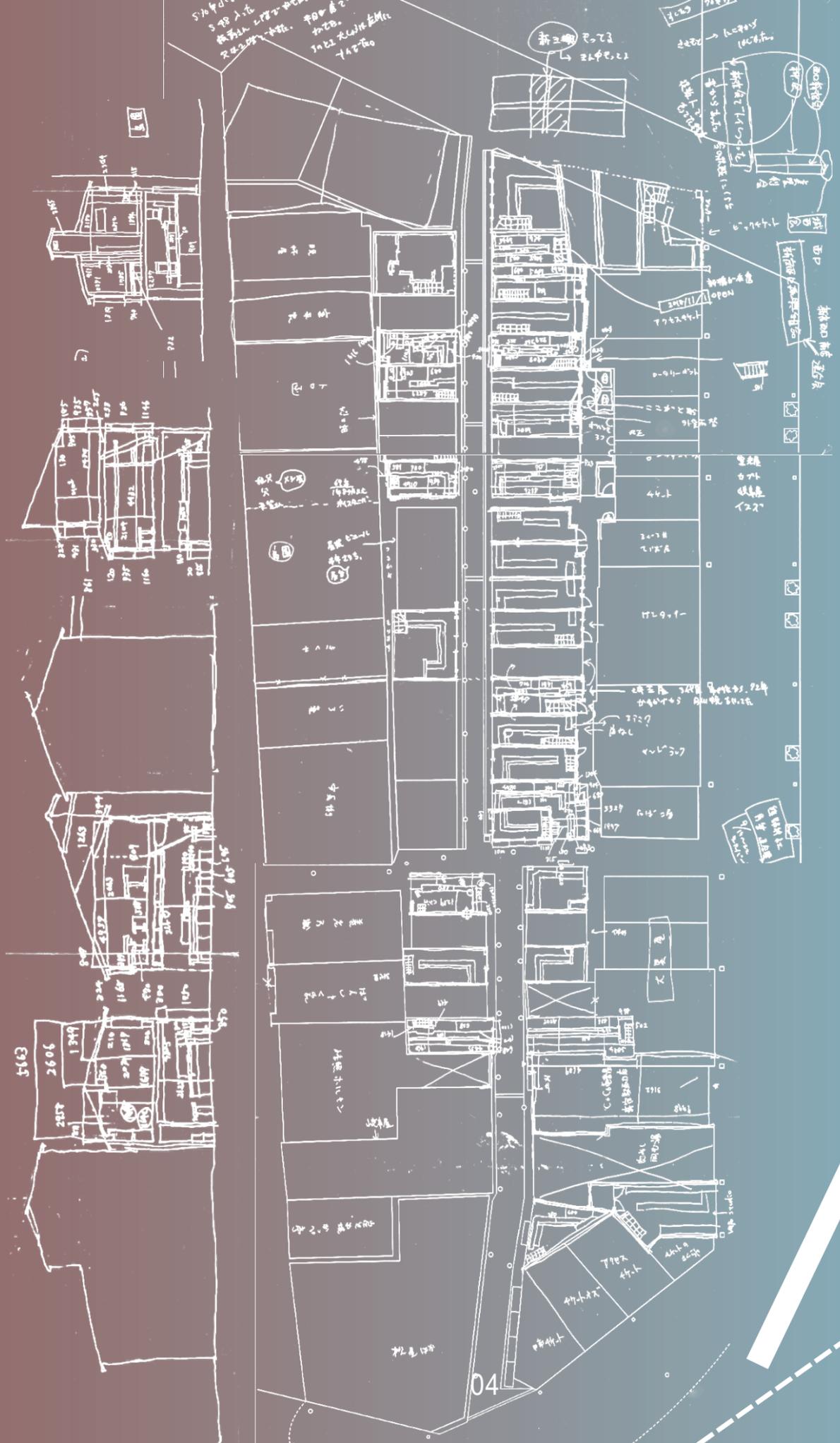


図3：新宿思い出横丁をまわりながら石博さんが描いた図面

Q.3 路地裏の居酒屋やバーが魅力的に思えるのはなぜ？

人間の都市空間に対する欲望はアンビバレントで、超高層ビルがたくさん建ち並ぶ再開発に憧れを抱く人もいれば、下町の路地に惹かれる人もいます。渋谷のきらびやかな再開発が進む足元には、間市を起源とするのんびり横丁がありますが、その魅力は再開発が進むにつれてより一層濃くなっているようにも見えます。三軒茶屋も超高層ビルが三角地帯と道を挟んで建ち、中層のビルが三角地帯の外側を覆っているがゆえに、内側の路地がより色濃く感じられるのでしょう。

身体的スケールよりも生産構造に対応してつくられたビルは、工業製品で覆われ、物理的に人間を突き放す建物になっていることが多分にあります。路地裏は超高層ビルと違って私たち人間のスケールに対応した建物とモノで溢れています。だから自分の身をおき、美味しいご飯とお酒を飲んで過ごすのであれば、路地裏の居酒屋やバーの方が心地よいでしょう。

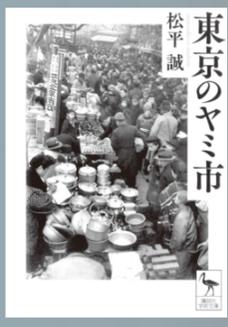
Q.4 これまで出会った路地のなかで、「また訪れてみたい！」と思う路地を教えてください。

私は東京の各地にある戦後の間市を起源とする路地が好きです。だからそういった場所をまわって研究しています(笑)。新宿の思い出横丁、ゴールデン街、渋谷ののんびり横丁、池袋の美久仁小路、栄町通り、新橋駅前ビル1・2号館の地下1階とニュー新橋ビル(いずれもビルですがそのなかに路地があります)、浅草の焼肉横丁、東上野コリアタウン、吉祥寺ハモニカ横丁……挙げれば切りがありません。そうした路地をまわって飲みながら図面を書いています(図3)。

Q.5 路地の営みや成り立ちを知る上で、おすすめの本を教えてください。



『百年の棲家』
松山巖 著 (ちくま学芸文庫、1995年)
※1985年に『まほろしのインテリア』として作品社より刊行したものを文庫化
この本の冒頭は「路地」という文章からはじまります。私が路地について考えるときに最初に思い浮かべた本です。1980年代前半、バブル期に向かって変わりゆく東京に暮らす松山巖が、東京が記憶できない「のっぺらぼうな町」になりつつあると警笛を鳴らしています。



『東京のヤミ市』
松平誠 著 (講談社学術文庫、2019年)
※1995年に『ヤミ市 幻のガイドブック』として筑摩書房から刊行したものを文庫化
三角地帯の路地の起源にもなっている間市について、東京の山手線沿線の事例をアドバルーンに乗ってまわるように紹介してくれます。東京の間市を考える上ではまず読むといい本です。



『戦後東京と間市 新宿・池袋・渋谷の形成過程と都市組織』
石博智 著 (鹿島出版会、2016年)
私の本です。東京の山手線沿線の主要な駅前の現在の風景は、戦後復興期の間市の形成とその整理の過程で出来上がってきたもの、といっても過言ではありません。この本では新宿・池袋・渋谷を事例に実際にその過程を空間的に明らかにしています。

2月17日（金）

ハワイと

返子を足した感じ

三軒茶屋駅前でレンタサイクル（1日200円）を借りて、下馬の方にある図書館へ向かう。

図書館の方に、三軒茶屋に関する書籍を聞いてみると、30年前に発行された『三軒茶屋の本』を持ってきてくれた。読んでみると、キャロットタワーができる前の資料が載っていて、貴重な情報を得ることができた。雑誌以外の資料が意外と少なかったのが驚き。

ランチを食べに行くため、茶沢通り沿いの中華料理屋に立ち寄り。そこのお店は不思議な常連のお客さんが多く、不動産関連にも詳しい方が店主だったので、いろいろと聞いてみようとする。が、手を横に振るだけで答えてはくれなかった。その感じもおもしろい。

三角地帯に戻り、自転車で何周かまわったり、再び歩いたりすると、また新たな発見があった。途中気になった落花生のお店で、購入がてらお店の人に話を聞いてみると、「このあたりは火事になったら終わりだからね！」という言葉も印象的。

もう少し資料を調べたいと思い、文芸関連のお仕事をされている方に連絡。自宅へお邪魔すると、漫画家の中村一般さんの『ゆるい犬と町散歩』や、地元の人が記憶を頼りに手書きした地図を見せてくれた。三角地帯のことも書かれておりおもしろい。谷内六郎さんの『旅と絵本』には、三軒茶屋の項目があり、俳優の故石原裕次郎さんが「三軒茶屋は、ハワイと返子を足した感じの落ち着いた街だ」と言っていたという記述。本を読んで、中村一般さんのお父さんが経営している居酒屋に立ち寄り、キーマカレーを食べる。

帰り道、どうしても気になって入った居酒屋さんは、三角地帯で働いている方が訪れるような大衆酒場で、壁紙に貼っている子どもの絵が印象に残った。もう1軒、30年前からあるという酒場に電話したところ、平日の3日間しか開いていないとのこと。再度立ち寄ることにする。



ぷり
浅草橋天才算数塾主宰。今年20周年企画としてクラウドファンディング実施中！
写真：穂写真館



Instagram: budo_hoshi



2月20日（月）梅ちゃんBARからの景色

三角地帯のあたりを歩くと、建物が後からどんどん増築されたのか、いびつなかたちのビルが目に入る。普段、夜飲みに行くところをお昼どきに歩くと、風景が変わって見えてとても不思議だ。駅前の通りからも見えるビル。都内をまわってもなかなか見ない。個人的に文化遺産として残したいくらいだ。

夕方、世田谷線で豪徳寺まで向かい、レタッチの仕事などをされている先輩と会う。30年前に上京したときの三軒茶屋の話などを聞いた。夜に梅ちゃんBARというところでイベントがあるらしく、遊びに向かう。

梅ちゃんBARは三角地帯のビル5階にあり、DJや音楽イベントをよくやっているらしい。今は閉店してしまった、レゲエバーをやられていた店主の方がDJするというので足を運んだが、病み上がりのせいか、夜遅くまではいられず。かわりに梅ちゃんBARの店主からいろんな話を聞く。

梅ちゃんBARから見渡す、飲み屋街の雰囲気。建物は違って高さに統一感があり、意外とまとまっているように見える。梅ちゃんBARの入っている建物は、60年ほど前に建てられたようで、オーナーは海外に行っていて消息不明。世田谷通り沿いのヤフーショップやドトールコーヒーの建物と、なぜかつながっていて、なんとも不思議な感じ。このあたりの空気感を、少しだが感じられるようになった気がした。話せずじまいのレゲエバーの店主とは、いつかどこかで会うことになるだろう。

2月22日（水）
今はまだ気がついていないこともある



昨年末に体調を崩して入院し、お酒が飲めなくなってしまったので、近所に住んでいる知り合いを呼んで、

気になったお店を2軒まわる。1軒目は、看板がでかでかと気になる焼肉のお店。入ってみると数年前まで切り盛りしていた女将さんに代わり、その娘さんがお店に立っていた。娘さんのお話では、数年前に大阪から越してきたそう。壁が薄いからか、隣のカラオケの音が漏れ聞こえる。ワンオペで営業しているため、最初にまとめて注文をしたが、ハラミのお肉が美味しかった。お客さんは長居もせず、サクッとお肉を食べて移動する人が多い。

続いて2軒目の小料理屋さんへ立ち寄り。純米酒とビールしか頼めないお店だが、女将さんが一人で切り盛りしていて、お酒を飲めない事情を話したら、温かいお茶を出してくれた。知り合いは日本酒を注文。お通しは3品ほど出てきて、どれも美味しい。カウンター越しにいろんなお話を聞いてみる。この場所は、1946（昭和21）年頃に寿司屋としてオープンし、女将さんは1966（昭和41）年頃に嫁いできたそう。当時の三角地帯は、今と違って住んでいる人がたくさんいたらしい。現在はほとんどいないそうだ。女将さんの優しい雰囲気と、テレビから流れる時代劇の感じが相まって、タイムスリップしたような気になる。

最後に、三角地帯をまわってみて、気がついたことをいくつか。お店に足を運ぶとき、何が楽しいかということ、職種・人種を気にせず、分け隔てなく話せる場があるということ。何年間か経ってやっと気がついたり、ある日突然発見したりすることが大事なかもしれないということ。

今、自分のなかで気になっていることも、おそらく日々変化していく。だからこそ、今ある風景や出来事というのは記録して、何年か経ってそれがなくなったり、別のものになったりしたとしても、残っているものを通して振り返ることが大事だなと思いました。



2023年2月16日（木）

歩きはじめ

三軒茶屋には、打ち合わせなどでほぼ毎日のように来ていた。久しぶりに訪れてみると、商店街の通りにあった昔ながらのお店が閉店していたり、新しいお店も増えたりしている。

キャロットタワーに立ち寄り、生活工場の担当の人に挨拶してから、キャロットタワーの屋上へ。高いところから三角地帯を眺めてみる。自分の足で歩く三角地帯はどのように見えるだろうか。

自分にとって生活考察は日常で、毎日歩くなかで、創作のアイデアが浮かぶこともある。同じ道でも、数年たつてようやく気がつく景色があったりする。何に興味をもつかによって視点が変わってくるのだ。お店を訪ね、そこにいる人とただただお話しするのも楽しい。

三角地帯といえば、千代の湯さんの銭湯の雰囲気が好きでよく行っていた。ほかにも、閉店してるのか、営業しているのかわからない場所があったり、ピカソの入っている建物は不思議な雰囲気があって、どうしても気になってしまう。

図書館に寄ろうとしたら、臨時休業だったので、明日また三軒茶屋に足を運ぼう。

三角地帯の一品目めぐり

文・イラスト：ヤマグチナナコ（編集者／イラストレーター）



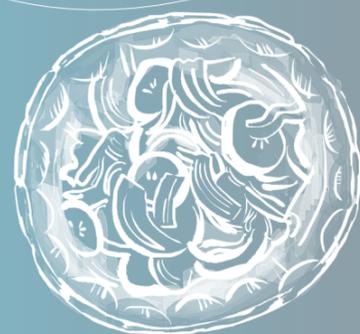
このお通しは紙コップのサブセルに入れて筒へ投げ入れるシステム

1階は満席で外席までお客さんがいるため、向かいの同系列店舗の2階へ。アルコールとともに出てくるお通しは茶豆と落花生。銀色の皿に逆さになったお椀が乗っており、それを外すとなかから茶豆が。多分この盛り方であらかじめたくさん準備してるんだろ。枝豆よりもちょっとだけ濃い味がする。落花生は殻付きで、話している間もつい食べてしまう。

① 軒目



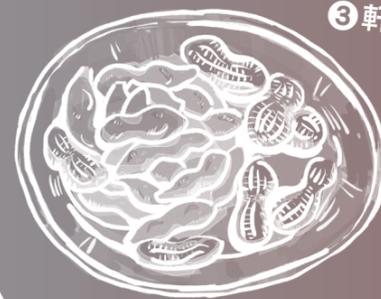
店内は土足厳禁で、ちゃぶ台くらいの高さの4人掛け机が3つとカウンター。お通しはないそうで、前菜からキムチを注文。キンキンのビールのお通しに提供される。甘みが少しあり辛さは中程度、発酵が進みや酸っぱめで美味しい。店主いわく「メニューは限られてますよ、狭い店ですから」。レバーのタレのレシピを聞いてみるも教えてもらえず。入り口横には元メジャーリーガーで現千葉ロッテの澤村拓一選手のサインが貼ってあった。



② 軒目

おしぼりと箸、お猪口が乗ったお盆をカウンター越しに渡してもらおう。日本酒を選んだあと、しばらく厨房に入っていた店主がカニカマとタマネギ、キュウリをマヨネーズで和えたサラダを出してくれた。塩っぱすぎず薄すぎず、マヨネーズのしつこさもない。カニカマが一定の細さで裂かれていてきれい。続いてイカ大根も。面取りされた大根と長さの揃ったゲソ、彩にかわれ大根。

③ 軒目



1994年東京都生まれ。小学校中学年から中学卒業までの6年間を上海で過ごす。武蔵野美術大学卒業後、雑誌社に編集として勤務。現在はフリーのイラストレーター、編集者として活動。株式会社HuuuuのメンバーとしてWebメディアの編集に携わるほか、雑誌『IWAKAN』などの紙媒体や、演劇公演のビジュアル制作、イベント企画などジャンルを縦横無尽に横断しながら自転車操業をしている。



ヤマグチナナコ



⑤ 軒目

店内真ん中にコの字カウンター、机と壁の間は人が通れるくらい。「お通しはありますか？」と聞くと、「ないですよ〜！」とのこと。ピーマン塩昆布を注文、すぐ出てくる。銀色の平たい皿に細切りのピーマン、上に塩昆布。これで十分だよな……と思いつちびちび食べる。後になって気づいたけれど、冷蔵庫から自分でジョッキを出すのがルールだった。

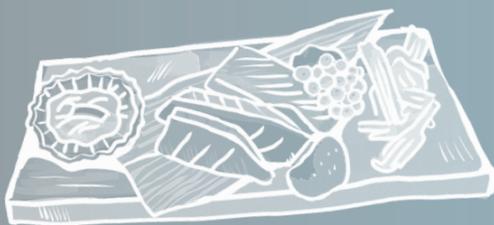


⑥ 軒目

日本酒専門の立ち飲み屋さん。お通しに出てきたのは小さな器に盛られたお粥。腹の足しにはならないが胃は温まるくらいの量で、ダシが効いていて美味しい。ほんのりお粥の味が残った状態で日本酒を飲むと、なんとなく旨みが増す気がする。米同士だから？

⑦ 軒目

21時くらいから営業している深夜食堂。夜な夜な定食を食べるのに向かう。お通しはお猪口（ではないかもしれない）に入ったお汁。にんじんや豚肉が入っていて少しだけ酸っぱい。1軒目としてのお通しというよりも、数軒をハシゴしたお客さんを想定しているような味。



④ 軒目

「いろいろ食べてきたのかな？」という店主の質問のあと、出てきたお通しはつまめる量の刺身の盛り合わせ。お刺身は角がしっかり立っていて、イクラはパツパツ。塩辛もいい塩梅のねっとり感。処理がきちんとされたお魚たちにびっくりする。暖簾とコースターが豹柄で、これにもびっくりした。22時までなら愛犬と会えるらしい。

まとめ



「お通しで三角地帯を観測する……本当にできるの？」と半信半疑でリサーチという名の飲み歩きをした。入店して「お通し？ ないですよ」と言われることもしばしば。結果的にお通しだけじゃなくて、一品目的なメニューも観測しつつの三角地帯行脚となった。

②・④軒目（以下、軒目略）は「うち

の店、こんな感じです」という名刺代わりの意味合いを感じた。スピードも大事で、②はお通しがゆっくり二品出てくることで、お店全体の空気感を客が察する。逆に④は店内に豹柄の暖簾やコースターが飾ってあり「どんなお店……？」とドキドキしてる場所に、サッとあのお刺身たちが出てくる。どちらもお店というエンタメに巻き込まれるような感覚。

対照的に③の茶豆と落花生は、一般的な居酒屋のお通しらしさがあった。お店の規模も他店より大きく、客席数も多い。注文と

提供の間のタイムラグをつなぐ役割としてのお通し。①や⑤は店の規模的にお通しを毎度出すよりも、最初に注文を聞く方がやりやすそう。三角地帯の狭い店舗面積と回転数がそのまま一品目にも反映されている。⑥や⑦は②の出し方に似ているけれど、どちらかというと「うちの店はこういう風にもてなします」という姿勢としてのお通し。⑥は出発点として胃を整え、⑦は終着点として胃を労わる……なんて連携しているわけではないと思うけれど。

狭い路地のなかで、どれだけ客が回遊してくれるか。それは

1店舗だけで決まるのではなく、そこに軒を連ねる店の多様性で決まる。狭い路地を飲み歩くことがデフォルトの三角地帯は、否が応でも店同士は隣り合い、メニューやお通しすらも干渉し合う。ともすれば、三角地帯においての一品目は、店同士で客を引き継ぐためのバトンパスなのかもしれない。前の店の体験をどう心地良く引き継ぐか。各店ごとにフォームは違えど、狭い路地に迷うことで深まる界限性の心地よさを、1秒でも長く体感させ楽しませる、に関しては見解が一致しているような気がする。

松田行正率いるマツダオフィス/牛若丸でブックデザイン修行の後、Monotypeで「たづがね角ゴシック」を設計。2017年にデザインスタジオnipponiaを設立。書籍の装丁を軸に文字デザイン、グラフィックデザイン、デジタルコミュニケーションデザイン分野で活動する。仮名書体「NPGエナ」「NPGクナド」、文芸誌『群像』専用書体「くんぞう」などを制作。女子美術大学非常勤講師。やまだ・かずひろ



映通社 「古書/映画」という看板に誘われとあるマンションに侵入すると現れた店名サイン。映画のプログラムやポスターの専門店とのことで、店名がもうカッコいい。そして飾らない手書きの丸ゴシック。どうも私は手書きの丸ゴシックに弱いようだ。この手の文字は看板屋さんの肉筆であることが多く、描いている姿を想像するだけでグッと込み上げてくるものがある。このしんじょうの書きぶりがたまらない。



ファッションビル第1

歴史ある街区にはオシャレな歴史あるビルが付きもの……このビルはまず名前がオシャレ。その上このネームプレートである。「ファッションビル」を名乗るのにふさわしい、縦長のプロポーションがとってもオシャレな丸ゴシックは、右上がりの柔らかなカーブのリフレインに文字の達人の太刀筋を感じる。文字同士の空き具合もまたオシャレなのだ。ちなみに「第2」もある。



門井不動産KK

GmbHならドイツ、有限公司なら中国、そしてKKなら我が日本の株式会社であることはインバウンダーにも一目瞭然。三角地帯に不動明王のごとく鎮座する「門井不動産KK」は黒光りする堂々たる隷書体がこの会社の堅実な仕事ぶりを象徴している。三角形のビルのエッジに下げられた縦書きの巨大な看板には、三角地帯を背負って立つ地球規模の企業としてやっていくという意気込みを感じる。

文：山田和寛（デザイナー）
もじ道楽 三角地帯編



MJハイツ

歴史ある土地のビルの名前というのは不思議なもので「良い文字」が多い。では「良い文字」とは何か。その答えは「MJハイツ」が知っている。「MJ」は既成の切り文字だろうか。「ハイツ」はMJの装飾的な字形にあわせてとおぼしきクルリとしたエレメントで統一されていてグッとくる。そして背景のレンガ調のグリッドに対して自由な傾きを与えられたレイアウトは、私のような凡庸な人間には到底たどり着けない高みにあって、悔しくてハンカチを噛んでしまう。



ゆうらく通り

路地裏の年季の入ったのんべえ横丁さながらのしっとりとしたレタリングである。しかし「ゆうらく」とはなんだろう。「らく」は「楽」として、この「ゆう」は「悠、遊、夕」とかそういった意味だろうか。それよりも私に気になったのはこの街灯サインの上の鉢植えである。一体誰が、何の目的で設置したものなのか。もしかしたら「ゆう」って「幽」？



スナック谷

年季の入ったアクリルサインは「これ自分がつくったことにならないかな……」と思わされる仕事の宝庫である。正方形のキャンバスにゴシック体で「スナック」、そして震えるような「谷」。1文字の店名だからこそ、この書きぶりはいっそう引き立ち、余白を生かしたレイアウトのよさもこのサインと店の雰囲気との演出に一役買っている。このような存在でありたいと思える文字である。



ABCビル

オレはこの幾何学的世界で幾何学的精神でやっていく、死ぬまで。と語りかけてきた、文字が。「ABC」は幾何学的サンセリフ書体の名作（フーツラ）だが、「ビル」はそのアルファベットの幾何学的精神を受け継いでデザインされているようだ。文字の高さは建物の仕上げの白磁のタイル2枚分の高さと揃えられているようだが、ただの背景であるタイル目地のグリッドまでも利用した文字の配置は、まさに幾何学の権化。



豆商はたの

老舗の豆屋さん「豆商はたの」は所狭しと並ぶカラフルなPOPが楽しいインテリアが魅力的。「大豆・バターピー・豆商・塩豆・落花生」と染め抜かれた文字はよく見れば中央の黄色い「豆商」だけが「肉筆」で描かれており、黄色のトーンが差し込まれることで歌舞伎の定式幕さながら店内をハレの場へと変貌させている。そういえば、書かれた書体も歌舞伎の文字。お土産に購入した黒豆は一瞬で私の胃の奈落に沈んだ。



山田和寛とグラフィティ

のんべえ横丁に親切なサインを発見。アクリル板に丁寧な手書きレタリング、設置者は誰だろう。入り組んだ路地裏にあって、酔いどれ前後不覚ののんべえたちにとってはまさに地獄に仏、道祖神のごとくありがたないサインであろう。グラフィティはこのサインよりだいぶ後の年代に描かれたものだろうが、ちゃんとサインを避けてくれている。本当はいい奴なんだろう。怒らないから名乗り出たまえ。

まとめ

杉並区から来た山田です。文字をつくったり、使ったりする仕事をしています。まちなかの文字やデザインを観察するのは趣味のひとつです。東京都内には戦後の闇市からはじまった駅前の「地帯」があちこちにありますが、ここ三軒茶屋の三角地帯は再開発の波もどく吹く風、どっしりと歴史の年輪を刻んできた文字たちがたくさん残されていました。ビル名の表示に使われている、既成の書体にとられない手づくりの切り文字、描き文字や、老舗のアクリル看板が特に目を引きました。全国各地に新しくつくられる「レトロっぽさ」を売りにするテーマパーク然としたデベロッパーによる開発地区と違い、ここには本物がたくさんあります。人々の暮らしのニーズに応え拡張してきたお店、住居、それらを彩る看板やPOPは、やはり無名の文字書き職人や生活者が下支えしていたのは想像に難くありません。文字の点画一つひとつに愛を感じます。市井の人々の、それぞれがもつ美意識の集合体が、近代的な均質さとはまったく逆のアジアの混沌となって多様な人の居場所をつくり出す、その風景が都市の美しさではないでしょうか。これからも歴史を重ねて混沌とし続けて欲しいと願うばかりです。

映画の「遺跡」と思い出を映すスクリーン

イラスト：しまおまほ（作家）



往年の名作ポスターが目印の映通社。



その内部は、映画のパンフレットやポスターで埋め尽くされている。



三軒茶屋から映画館はなくなりましたが、今なお残る「三軒茶屋シネマ」(2014年閉館)の看板。



しまおまほ
1978年東京都生まれ。多摩美術大学卒業。著書に『家族って』『スーベニア』『マイ・リトル・世田谷』『ガールフレンド』『まほちゃんの家』など。



映通社 千154-0024 東京都世田谷区三軒茶屋2-14ロイヤルマンション三軒茶屋1F (店頭販売休止)

また訪れたいと思っても、あの日どこを曲がってどうたどり着いたのか。いくら探しても見つからない店が、路地が、このまちにはある。味も香りも看板も、目の前を通り過ぎた猫の柄だって覚えているというのに。「たしかあのあたり」という地点までは行けても、そこからどうにもこうにもハッキリしない。記憶にある景色には霧がかかったまま「おかしなあ……でも、いつかまた、きっと来られるさ」と来た道に戻る。



映通社は、そんな迷宮の入り口のような場所にある。いつも不思議だったのだ。雨の日にバスを待っている間、気になって恐る恐る外から覗くと中に灯りがついてた。でも入り口は閉ざされていて、ガラスの向こうにうず高く積まれた段ボールと冊子らしきものの塔がいくつも立っているのが見える。『追跡者』『ブッシュマン』『レッドバロン』『スケバン刑事』……。外へ向かって貼り出されたポスターから、中には「映画」の遺跡があるのだということはわかった。でもそれが古本なのか、資

料なのか、フィルムなのか……。謎が謎のまま、バスの時刻はやってきてしまうのだ。そういえば、昔よく入ったすぐ側の輸入雑貨屋も、セレクトショップも今はもうない。昔から変わらずあるのはエコー仲見世、それに銀行と証明写真と、映通社。

まさか、その謎を解く日が来ようとは。あの、固く閉ざされた(と、勝手に思っていた)扉を開けると、そこは夥しい数の映画のパンフレットとポスターに囲まれた鍾乳洞。映通社は創立約50年。映画のパンフレット・チラシ・ポスターを販売している会社だった。ここは2000年頃まで実販売していた元店舗だったのだ。天井まで積み重ねられたパンフレットたちはこれでもまだ一部で、ほかは倉庫に保管されているらしい。本棚で区切られた一人しか通ることのできない通路。移動方法は前に進むか、後退りか。下手にまわれ右をしたら足元の山が崩れてしまう。通路を塞いでいた大きな板を従業員の男性が開閉橋のように上げて開通してくれた。机とパンフレットの山に板を渡して作業台にしていたらしい。彼の居場所もその机以外ないのだ。

パンフレットは書籍のように背表紙がないのでひと目でタイトルがわかりにくい。どうやって見分けるのかと尋ねると「劇場ごとに五十音で並んであるから、だいたい検討をつけて……。あとは色・形で」。ミニシアター系は劇場ごとに判型が同じなので見つけやすい、とも。目当てを探す作業は遺跡発掘さながらだ。

「バイト雇うにも人材を探すのが大変で……映画が好きじゃないとまず務まらないから」と、オーナーの福原

さん。彼も多いときは1年に1,000本以上の映画を観ていたという。三軒茶屋のこの場所に、なぜ映画のパンフレットの店が……今では唐突に感じるかもしれないけれど、三軒茶屋にはかつて映画館があったのだ。「三軒茶屋映画劇場」「三軒茶屋シネマ」「三軒茶屋中央劇場」。2013年に閉館した中央劇場には思い出がある。1997年、美大1年生の夏。初めてのボーイフレンドと観た初めての映画が中央劇場での『マーズアタック!』だった。世田谷育ちだったわたしが、札幌から出てきて半年に満たない彼から中央劇場を教えてもらった。カッパの男の子と女の子に出迎えられるレトロな外観。わたしたちの初映画デートはほのかなカビの臭いがした。ちなみに、2回目の映画デートは『もののけ姫』を渋谷で。



90年代、三軒茶屋駅南口の程近くに住んでいたというフリーアナウンサーの南部広美さんは初デートの場所であり、またその彼と別れる際、最後に映画を観たのも中



央劇場だったという。パーソナリティをしていたエフエム世田谷で三軒茶屋の映画上映情報を読み上げていた思い出も。「映画とは関係ないけど……」と南部さんは栄通り商店街沿いにあるライブハウス「HEAVEN'S DOOR」にもよく通っていたと話してくれた。フラックと入って無名のバンドを観て帰るんだとか。そういえば、わたしも高校時代に好きな男の子のパンクバンドのライブをここへ観に行ったことを思い出した。三軒茶屋は南部さんとわたしにとって青春のまちだったらしい。

ams西武(現・西友三軒茶屋店)5階の映画上映スペース「スタジオams」の名も忘れないでほしいと、友人の映画ライター小柳帝さんや漫画家杉作J太郎さん。年齢83歳の母に至っては子どもの頃、映画を観に行くなら三軒茶屋か経堂に2軒あった映画館だと言い出した。まさか経堂にも……。誰かと話す度、それぞれの懐かしい思い出がスクリーンに映し出される。



この証明写真は驚き外と「三軒茶屋」である。

編集協力：杉本勝彦

生活工房では、1年間の活動をまとめた記録・報告書として毎年アニュアルレポートを発行しています。開館25周年という節目にあわせて、昨年度から本誌のリニューアルを進めてきました。今年度、新たなアニュアルレポート&特集を発行することができ、ご協力いただいたみなさまに感謝いたします。

昨年度のアニュアルレポートの特集を企画制作するなかで芽生えた「文字や形に残らない、暮らしの営みは記録できるのだろうか？」という素朴な問い。この問いを起点に、今後も展示やイベント、そしてアニュアルレポートを通して、「生活の記録」について来場者・読者のみなさまと一緒に考えていきたいと思えます。ぜひ、アイデアやお声を寄せてください。

ちなみに編集会議では、こんなアイデアが！

- 展示やイベントの来場者が、それを体験したことでつながっていったこと、感じたことを共有する場、メディアをつくれるとおもしろそう！ 単なるアンケートではないワークシートのよさ……？
- 本を読みながら余白に書き込みを行う読書法「マルジナリア」の考え方をお手本に、アニュアルレポートを読む、生活と記録の研究会を立ち上げてみたい。
- 生活の記録という観点で、生活工房のなかだけではなく、周辺のお店をピックアップしてメニューのレシピ本をつくるのは？ レシピは新たな記録の手法です。レシピから溢れる物語もすくい上げ、何十年もの営みを記録できる可能性がある気がする。
- 路地の成り立ちについて、当時を知る方々の言葉を集めていくことはできないか。
- 2016年に行われた展示「三軒茶屋 三角地帯 考現学」や過去の記録を、現在に引き継いで企画を考えられるといいかも。



生活工房 Webサイト「特集 謎の三角地帯を切り取る」

今ある生活の営みを残し、引き継ぐことができないだろうかと考え、本特集を企画しました。

生活と記録の実践集 世田谷・三角地帯に暮らしの痕跡を探す

生活工房アニュアルレポート2022

発行日：2023年5月25日

編集：多田智美、永江大、鈴木瑠理子（株式会社 MUESUM）、生活工房

デザイン：吉田勝信（吉勝制作所）

印刷：今野印刷株式会社

協賛：株式会社東急コミュニティー

発行：公益財団法人せたがや文化財団 生活工房

〒154-0004 東京都世田谷区太子堂4-1-1キャロットタワー

電話：03-5432-1543

ファックス：03-5432-1559

メール：info@setagaya-ldc.net

Webサイト：https://www.setagaya-ldc.net

本書の無断転写、複製、転載を禁じます。
©Setagaya Arts Foundation Lifestyle Design Center 2022-2023
Printed in Japan